

はじめに

本校におけるふるさと教育事業は今年度で4年目となった。従前は3学年を縦割りにし、学年の枠を越えた学びあい、教えあいの姿がみられた。その中であって、研究を進めるにあたっては高学年の生徒が中心となる状況であり、特に高校生活をスタートしたばかりの1年生の「主体性」をどのように確保するかという点で課題が生じてきていた。この課題の解決のために、今年度は1年生全員を「研究の基礎」領域の所属とした。内容としては以下の構成とした。

- ①地域を知る－講話をとおして－
- ②地域で活動する
 - ・毛馬内盆踊り
 - ・かづの元気フェスタ
 - ・鹿角観光いろはカルタ十和田版題材地を巡る
- ③情報を伝える－発表の効果的な行い方－

上記のプログラムによって2年次以降の主体的な学びへと接続させ、①ふるさとの素晴らしさの発見、②ふるさとへの愛着心の醸成、③ふるさとに生きる意欲の喚起、④ふるさとについて発信する力の育成、の本校ふるさと教育「かづの学」が掲げる4目標の達成を図りたい。

I テーマ設定の概要

本稿は、「研究の基礎」領域における導入部分として実施した、馬淵大三氏による講話をもとにまとめたものである。馬淵氏は、鹿角の経済界や文化・伝統に関する多様な役職を担っている方である。以下のテーマを設定していただき、鹿角市立立山文庫継承十和田図書館を会場に講話を行っていただいた。

- 5月30日(火) 毛馬内盆踊りについて
- 6月6日(火) 鹿角四姓について
- 6月20日(火) 鹿角の鉱山と産業について

上記のうち本稿では「鹿角四姓」と「鹿角の鉱山と産業」についてまとめた。「毛馬内盆踊り」についての詳細は他稿を参照していただきたい。

II 鹿角四姓について

「鹿角四姓」とは「鹿角四氏」ともよばれ、鎌倉時代から戦国時代に至るまでの期間に鹿角地域を支配していた成田氏・奈良氏・安保(あぼ)氏・秋

元氏のことである。いずれも関東の武士で、秋元氏以外は親族関係であるとされる。

(1) 成田氏

武士の多くは、居住し開発した地名をとって名字とし、一族を形成した。初代鹿角郡地頭の成田助綱(すけつな)の祖父助高(すけたか)は、現在の埼玉県熊谷市にあたる武蔵野国播磨郡成田郷に居住することで「成田」姓を名乗った。「成田」とは、湿地帯の川原や沼などが「田になった」ということが語源とされている。現在、熊谷市には成田という地名はない。かつてあった成田村は、成田上村、成田中村、成田下村に分村し、その後上村に合併し上之(かみの)という地名になり現在に残っている。

(2) 奈良氏

奈良氏は、前述の成田助高の三男にあたる成田高長(たかなが)が、現在の埼玉県熊谷市奈良に居住したことを起源とする。「奈良」は、平らにすることを意味する「ナラス」が語源といわれる。地名としての「奈良」は、上奈良村、中奈良村、下奈良村の三村が古くからあり、現在も熊谷市の大字となっている。

(3) 安保氏

安保氏は、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代にかけて武蔵国を中心として勢力を伸ばしていた同族的武士団の「武蔵七党」のうちの「丹党」に属していた新里経房が安保郷に居住し、安保氏を名乗ったことに由来する。安保郷とは、現在の埼玉県児玉郡神川町元阿保である。「アボ」とは地形に由来する言葉で、「崖」を意味するものである。

この安保氏が鹿角にいつ入部したかは明確にはないが、成田氏から安保氏へ娘が嫁いだことにより親族関係となっている。

(4) 秋元氏

秋元氏については、安保氏以上に明らかになっていない点が多いが、現在の千葉県君津市、かつての上総国秋元庄に由来するとされている。ただ、その秋元氏がどのようにして鹿角に入部したかについては推測の域を出ない状況にある。

III 鹿角の鉱山開発について

鹿角は鉱産資源に恵まれた地で、そのことが鹿角を豊かな地にしてきた。3つの鉱山について教えていた

だいた。

(1) 小真木鉱山

この鉱山は、白根→駒木→小真木と改称してきた。南部藩の奉行であった北十左衛門によって開発された。これには伝説がある。

十左衛門が白根付近にいたとき、老女が二人の孫の手を引いて、涙ながらに訴えてきた。内容は、「孫は両親を失い、田畑は伯父に横領された。私が死んだら孫は生きていけない。今のうちに調べてもらいたい。」というものであった。調べた結果、田畑は孫に返ってきて、伯父は3両の科料に処せられた。その翌日、老女はお礼に山芋を持参した。十左衛門が部下に芋を洗わせると光るものがついており、それは砂金であった。十左衛門は老女のもとを訪ね、「その方の持参した山芋の味は格別であったが、いかにも土地の模様が違う。何ならこの山を売らぬか。代金は望みにまかせる」と申し出た。十左衛門は人夫を使って山芋を運ばせたが、洗っては味が落ちると言い、土ごと運ばせたという。これが小真木鉱山開発の始まりである。

史実としては、1598（慶長3）年に開発が始まったとされている。

(2) 尾去沢鉱山

尾去沢では、708（和銅元）年であると伝えられている。ここで採掘された金が奈良・東大寺の大仏鑄造に用いられたとされるが、時の権力者の隠し金山であったため、確かな記録は残っていない。記録に登場するのは16世紀になる。1599（慶長4）年に五十枚金山、1602（慶長7）年に西道（さいどう）金山が発見され、1643（寛永20）年に開発に着手された。その後は銅鉱の発見も続き繁栄を極め、尾去沢銅山は、出羽秋田（阿仁）銅山、伊予別子銅山（愛媛）とともに、わが国の三大銅山とよばれるようになった。また、明治には足尾（栃木）・日立（茨城）を加え五大銅山とされた。この時代に鉱業権は岩崎家＝三菱に渡り、以降閉山まで三菱の銅山として近代的な開発が進められた。1943（昭和18）年に月産10万トン、従業員4,486名を記録したのが最高となり、その後は1966（昭和41）年に製錬部門の廃止、1978（昭和53）年には銅価格の低迷と鉱石の枯渇により閉山となった。このことは鹿角の経済においては大きな打撃であったが、東京－青森間を結ぶ東北自動車道が鹿角を通ることになり、高速道路建設がその後の地域経済を支えることになった。

(3) 不老倉鉱山

不老倉鉱山は江戸時代から栄えた銅山で、1678（延宝6）年に盛岡から北上川経由で大坂へ、1681（延宝9）年には野辺地湊より大坂まで輸送された記録が残っている。その後一時休山ののち1775（安永4）年に藩の御手山となり、それまで狼倉（おいぬくら）

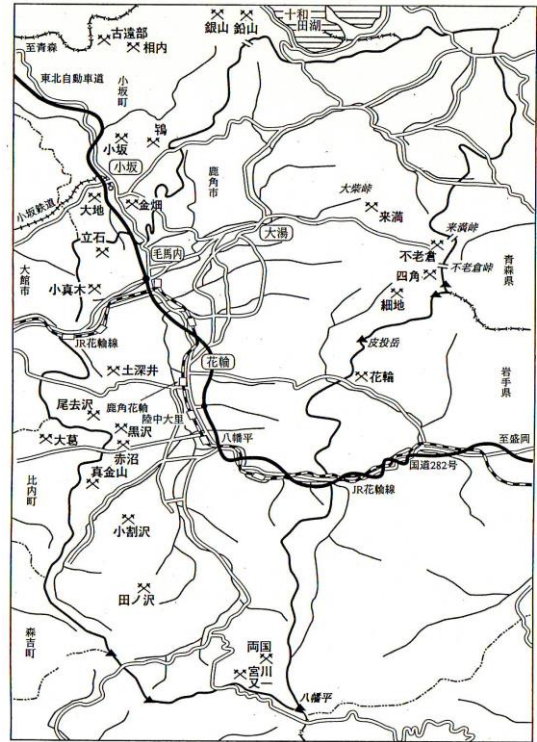


図1 鹿角の主な鉱山(鹿角市史第四巻より引用)

とよばれていた山名を不老倉と改めている。1887（明治20）年には鉱山王ともよばれた古河市兵衛の経営に移り、生産量を増した。1905（明治38）年には、わが国の重要鉱山に指定された。第一次世界大戦が好景気をもたらし、最盛期は従業員3千人、人口は1万人を越えたといわれている。しかし大戦後は銅価の急落により衰退、1927（昭和2）年に休山、その後1942（昭和17）年に再開されるも大きな発展はみられず、1964（昭和39）年に休山した。

IV おわりに

名字には地域性があり、「〇〇の名字だと住んでいるのは〇〇（地名）の人だ」という会話が鹿角ではよくされるように思う。それはなぜかといえ、鹿角四姓といわれる、ルーツを探ることができるポイントが存在するからであった。また、鹿角は「鉱山」が身近にあるという点が、他地域と比較したときの大きな特徴である。鉱山開発では、また異なる姓の人たちが往来した。尾去沢鉱山は現在観光化され、行動見学もできることから、「鉱山といえば尾去沢」との印象が強い。事実、日本を支えた鉱山であるが、小真木や不老倉のように、鹿角全体が鉱山によって活況を呈する状況があったことを理解しておく必要を感じた。